

「遊び場・屋根のない教場」

—デイヴィッド・ストウ著『トレーニング・システム』より—

**The Play-ground, or uncovered school-room**

*The Training System: Moral training school and Normal seminary  
for preparing school-trainers and governesses*

(Elibron Classics, 2006)

山崎洋子\*

YAMASAKI, Yoko\*

1. ストウと『トレーニング・システム』

—教育史的な位置づけ—

教育史上、ストウ (Stow, D., 1793-1864) といえば、今日にまで継承される学級教授 (Class teaching), 一斉授業 (Simultaneous Instruction), 遊び場 (Play ground), さらに初等学校や幼児学校における男女共学など、現代もなお存続している教育目的, 教育内容, 教育方法に関する理論を唱道した人物として知られている。

ストウがグラスゴーの教員養成学校 (Training school at Drygate) や教員養成カレッジ (Teacher training college) で教えた内容や方法は、グラスゴー・システムあるいはストウ・システムと称されてイギリスの教員らに伝播し、それは『身体・道徳トレーニング』(1832) と題する著作にまとめられて刊行された。

教育史家・カニングham (Cunningham, P., 1948-) によれば、ここで「強調された『道徳』は、ストウの教育思想のなかでも中核に位置し、キリスト教の宗教的文脈と彼の理解する子どもの感情面の発達を重視したものである。当時の状況では、ストウの用いる『道徳』の言葉は、現代の私たちがより世俗的に理解している「情緒 (emotional)」の文脈、すなわち感情 (feelings) や態度 (attitudes) の発達を含んでいる<sup>1</sup>。つまり、ストウの用いる道徳は、今日的な意味での道徳ではなく、感情や態度を含意していたということに留意する必要がある。

また、ハミルトン (Hamilton, D., 1943-) も、ストウは、アダム・スミス (Smith, A., 1723-1790) の「共感 (sympathy)」あるいは「多数者の共感」概念の影響を受けている<sup>2</sup>、と考察している。であるならば、ストウの用いる「道徳」の言葉は、シャッフツペリを主祖としスミスに至る「道徳感覚学派 (moral sense school)」の思想の延長線上にあることになる。それゆえ、とりわけ産業の振興する社会状況を背景に展開されたストウの教育思想も、これを敷衍するならば、「神の見えざる手」というメタファーで活写された、と理

解することができよう<sup>3</sup>。

さて、その後、ストウは『トレーニング・システム』(1836) と題する著作を出版する。身体・道徳のトレーニングを教育の第一義とする彼は、それに取り組む教員 (teachers) の最大の課題を「トレーニング・システム」という言葉に集約させたのである。ちなみに、この著作の刊行年である 1836 年は、ストウが後に枢密院教育委員会の議長となるケイ＝シャトルワース (Kay-Shuttleworth, J. P., 1804-77) の支援を得て、グラスゴー教育協会を教員養成カレッジに発展させることに成功した年であるので、当時のストウがいかに精神的に活躍していたかが想像できよう。ストウのトレーニング・システムの著作は、その後も、改訂と出版を繰り返し、学校教育の伸展とともに教員養成上の重要な著作として位置づけられることになる。それは、『トレーニング・システム』には、学校教育に携わる教員に必須の基本的な考え方や教授法に関する理論が、詳細に述べられていたからである。そして、ストウの教育思想は、教員という新しい職業が出現する 19 世紀半ば以降、『トレーニング・システム』を介してイギリス全土に普及していったのである。

ただ、ここで留意しておきたいのは、『トレーニング・システム』のなかで展開された一斉教授、遊び場、男女共学といった教育に関する思想は、彼のオリジナルな思想ではない、ということである。実は、それはイングランドのウィルダスピン (Wilderspin, S., 1791-1866) という教育者が考案したものであった<sup>4</sup>。

ウィルダスピンは、幼児教育運動を主導した人物として知られているが、ニュー・ラナーク<sup>5</sup>の工場内に性格形成学院 (Institute for the Formation of Character) を付設したかの社会主義者、オウエン (Owen, R., 1771-1858) の強調した健全な心身の発達を重視した教育思想を受容し (図 1)、オウエンと同様に、助教 (monitor) によるモニトリアル・システムを批判し、幼児期の教育の重要性を主張した。そして、ギャラリー・システム (図 2) や遊び場 (図 3) を考案し、

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

子どもの身体の健全な発達を強調したのである。このウィルダスピンは、1826年から幼児教育思想と幼児学校協会の普及のためにイギリス各地を訪問し、幼児教育の重要性を講演していた。そこで、ストウはウィルダスピンをグラスゴーとエジンバラでの講演会に招聘し、ギャラリー・システムや遊び場の思想を普及することに尽力していったのである。以後、彼らの友好関係は続いていくが、ストウは、教員志望者向けにウィルダスピンの教育思想や方法論を盛り込みながら、全人としての子どもの能力をいかに訓練するかについての論述活動に取り組むことになる。

図1 子どもの表現活動(性格形成学院教場の掲示写真)



出典：ニュー・ラナークにて2011年11月24日筆者撮影

図2 サミュエル・ウィルダースピン構想の幼児学校の遊び場

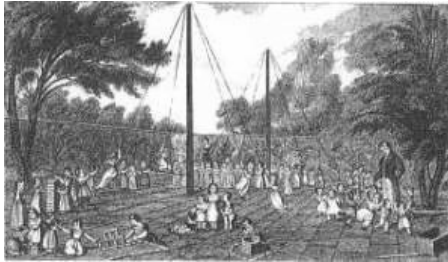
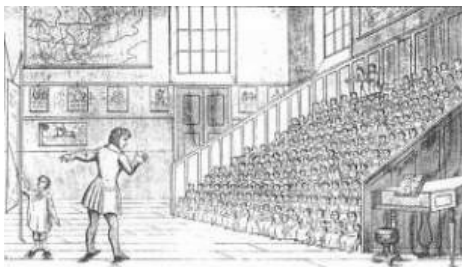


図3 ギャラリー・システム(地理の授業)



Source: *Ibid.*

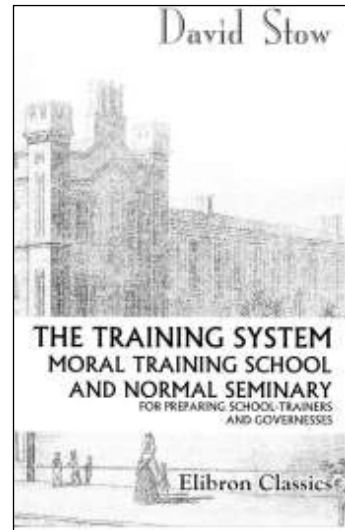
Source: Wilderspin, S. *A System for the Education of the Young*, James S. Hodson, 1840, 表紙内側(頁数記載なし)

## 2. 『トレーニング・システム』の内容構成と「遊び場・屋根のない教場」<sup>6</sup>の位置づけ

本稿が用いる『トレーニング・システム (*The Training System: Moral training school and Normal seminary for preparing school-trainers and governesses*)』(2006)は、ロンドンの Longman, Brown, Green and Longmans による 1854 年刊

行の著作の復刻版古典シリーズであり、これは、総頁数 574 頁(序文と目次で 12 頁、本文 536 頁、補遺 26 頁)のまさに大著である。それは 8 つのセクションに分けられ、全 48 章で構成されている。また、表紙(図 4 参照)を飾る教員養成学校の建築物は、ゴシック様式のものであり、学校教育が教会同様に威厳のあるものであったことが窺われる。

図4 『トレーニング・システム』表紙



Source; Stow, D. *The Training System: Moral training school and normal seminary for preparing school-trainers and governesses*, Elibron Classics, 2006.

目次には、タイトルの記されていないセクションも盛り込まれているが、以下、各セクションのタイトルを列挙しておきたい。

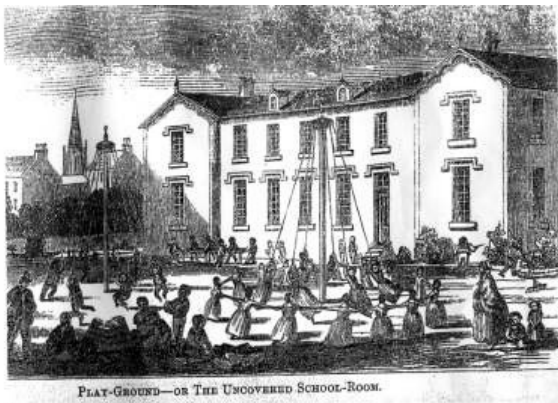
- Section 1. 概説 (The General argument.) (pp. 1-111)
- Section 2. 徳育学校の必要性 (Necessity for moral traing schools.) (pp.112-152.)
- Section 3. トレーニング・システムの顕著な特徴 (Distinctive features of the training system.) (pp. 152-229.)
- Section 4. トレーニング・システムの運用のための規準あるいは規則 (Norma or rule for conducting the training system.) (pp. 230-341.)
- Section 5. タイトルなし (pp. 342-371.)
- Section 6. 実践例 (Practical examples.) (pp. 372-428.)
- Section 7. タイトルなし (pp. 420-484.)
- Section 8. その他いろいろ (Miscellaneous.) (pp. 485-536.)
- Appendix Bible emblems, Practical example, Skelton sketches (pp. 1-24.)
- Advertisement to tenth editions 各セクションの要約 (pp. 1-2)

ここで注視しておきたいのは、これら8つのセクションのフレーズが示しているように、感情面を含んだ道徳性の涵養を中核に据えつつ、理論と実践を統合させようとする視点が認められることである。

さて、本解題において取り上げたいのは、セクション3の「トレーニング・システムの顕著な特徴」に収録されている第17章「学校の諸前提—ギャラリー、プレイグラウンド」の1つの項「プレイグラウンド、屋根のない教場」である。これは約8頁の短い論述であるが、その内容を概観するならば、この論述は、イギリスの学校教育活動における「遊び」や「遊び場」が位置づけられた嚆矢と捉えることができる。

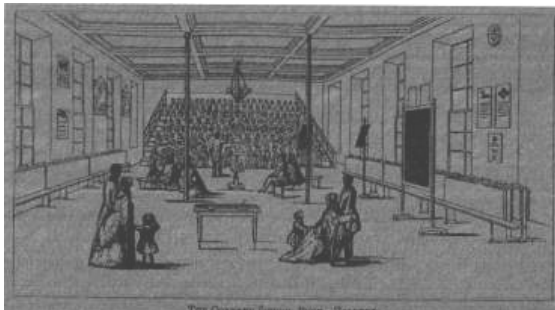
また、この項の後に収録されている次の2つの図は、いずれも明記こそされていないが、ウィルダスピンの著作からの引用である、ということがわかる。言い換えれば、ストウは、ウィルダスピンの「プレイグラウンド、屋根のない教場」の理論に基づきながら、学校教育の方法について述べているのである。

図5 遊び場と回転式ブランコ



Source: Stow, D. *Ibid.* p. 215.

図6 ギャラリー・システムと教場



Source: *Ibid.*, p. 216.

### 3. 邦訳「遊び場・屋根のない教場」

以下、「遊び場・屋根のない教場」の訳出作業に先だって、凡例を示しておきたい。

#### <凡例>

1. イタリックで強調された単語は、ゴシック体にして強調印を文字の上に付した。
2. 原典の‘ ’については、カギ括弧「 」を用いて表記した。
3. 原著者が補った（ ）の言葉は、[ ]で表した。
4. 訳者が補った言葉は、[ ]で表した。
5. 講演のイメージを出すため、邦訳敬体文にした。

#### <邦訳>

##### 「遊び場・屋根のない教場」<sup>7</sup>

遊び場は**屋根のない教場**といえるでしょう。子どもたちのあらゆる能力、気質、性格を発達させ、機能させていくためには、**屋根のある教場**だけでは不十分なのです。毎時間、歌を歌いながら行進して子どもたち自身のそれぞれの部門の部屋 (department) を出たり入ったりすることによって、秩序、従順さ、凡帳面さが養われます。

遊び場は、男性教師 (master-trainer) の監督の下に、悪い影響を与えずに、無邪気で、楽しい様々な娯楽へと「逃れる」ために、**汗をかくこと (the steam)** を鼓舞し、激励し、許します。

そのような意図でつくられた訓練学校 (training school)<sup>8</sup> には、路上でしつけを受けていない友だちによってしばしば影響を受ける悪い習慣から、子どもたちを遠ざけるだけでなく、良い習慣を身につける機会もあります。普通の学校では学校を出るときに、ある子はけんかをしないように、と命じられるかもしれません。しかし、[教場の] 階段の下や街角で彼を注意して見てみましょう。授業が終わるや否や、彼は鳥かごから再び逃げ脱した鳥のように、遭遇するすべてのものに激しくぶつかりそうになります。ある子に他の子からこまやビー玉を奪わせてみましょう。そうすると、続いてほとぼしり出るのは、私たちの本性のうちで最悪の感情です。こうなると、二人とも過ちをおかしてしまうでしょう。一人は**奪い**盗む性癖を使い、もう一人は、あるいはおそらく二人とも、攻撃という粗暴な性癖を行使するでしょう。その問題を解決する掟は理性や正義ではなく、身体の暴力なのです。

他のどの学校でも起こるように、道徳訓練学校でも、挑発された男の子は怒るでしょうし、仲間の耳をなぐるかもしれません。そして、おそらく彼もお返しにそれをくらうでしょう。しかし、この事態はここで終わるに違いありません。というのは、たとえ教師がそれらを見ていなくとも、とりわけしつけが良くて強い感情の支配下でない周りの子どもたちが、すぐにけんかを止めるからです。ちょうど放縦が生まれつきの性癖を増大させて強めるように、争いを控える習慣が争いを抑制して弱めることが認められることでしょう。

真の人格や気質は、年齢や趣味が似ている仲間と遊ぶ

と、最も良く発達します。しかし、遊び場は、道徳訓練の場か、いたづらをする場かのどちらかでしょう。権威ある監督者の目が注がれずに子どもたちが一人であると、いたづらはとてもよく現れてきます。

ですから、公立学校の教師は、生徒たちが楽しい娯楽の自由を十分に得られるように、自らの支配秩序の一部として、**入念に取り付けられた付属の屋根のない場所を持つ**場合にのみ、監督者たり得るのです。門番や年少の助手は、教師の代わりになれません。監督者は、ギャラリー<sup>9</sup>に戻る途中でも、子どもたちの行動についてコメントしてやる人でなければならず、また、学校体制の特別部門の長であることを感じさせ、それを承認される人でなければなりません。つまり、子どもたちは、教師自身の生徒 (scholar) でなければならぬのです。

教場から少し離れた所に遊び場がある〔学校の〕教師もいるでしょう。これでは教師は監督者たり得ず、訓練の場が身体運動のための場所になるだけです。教師がいない方が、まちがいなく子どもたちの性格と気質は発達するでしょう。しかし、そのような発達は、道徳訓練にはならないのです。取り組んでいる内容が、ある場所では身体訓練、別の場所では知的訓練、第三の場所では道徳訓練ということになるのではなく、その全体の訓練を、毎日、しかも一人の監督下で行うことです。家庭でのしつけ (training) は、ある程度までは炉ばたで行われるかもしれませんが、しかし、それが非常に大切で重要なものではあっても、学校でのしつけの埋め合わせをすることができないのは、学校が家庭の埋め合わせをすることができないのと同じです。家庭でのみもっぱらしつけられている子は、活動的な生活をするための本分〔を育てる〕には適していません。その子どもは、知るべきことや避けるようにしつけられるべきことの多くを知らず、さらに、とりわけ自分自身について無知です。彼の本当の気質と性格は、十分に発達していません。しかも、それらが点検されて調整されるという理性の〔発達する〕見込みがある人生の一時期に、彼の気質や性格は試練を受けていないのです。

既に述べましたように、遊び場、すなわち「屋根のない学校」は、あり余る動物的生氣、あるいは「汗 (steam)」を発散させるのに役立ちますが、同時に、それは遊び場がない場合に必要とされる通常の強制を課すことなく、児童の健康を増進し、くつろぎを与え、屋内でなされる他の授業での満足を保証するのです。

実際、遊び場は、7-11 歳児部門 (Juvenile Department) でも 5-7 歳児部門 (Initiatory Department) でも<sup>10</sup>、子どもたちの実生活の主な場、すなわち彼らの本当の性格や気質が現れる場です。そして、彼らが自由かつ抑圧されることなく、飛び跳ねたり体を揺らしたり、鬼ごっこや球やビー玉で遊ぶことができる場です。とりわけ 5-7 歳児部門では、触りたがりやの少年少女が花壇の周りに植えられた花

が開くの、繊細で柔らかい花びらを傷つけているとは思わずに調べているのが目撃されるかもしれませんし、数学好きの幼い数人の男の子が砂だらけの砂利に描いた正方形や円に並んで立っているのが観察されることもあるかもしれません。そして、学校の戸口の上り段では、数人の「独特の性向をもった者 (cast peculiar)」が、抽象的な夢想にふけりながら座っているのが見られるかもしれません。積み木も、私たちの幼い建築家たちの技巧と趣味のための素材を提供します。外が濡れているときには、積み木で城や正方形などをつくる楽しみが屋内でもできるでしょう。遊び場では、ときには多くの子どもたちが一人の子ども〔その子は、スポーツではボランティアとして行動するのですが〕を円の中央に置いて、〔積み木で〕屋根をつけて覆うと、彼または彼女はあらかじめ決めていた合図で飛び出し、集った子ども集団の歓声のまっただなかで組み立てられたもののすべてを壊すのです。これらの積み木は、長さ 4 インチ [2.54cm×4=10.16cm]、幅 2 インチ、厚さ 1.5 インチです。建築を好む傾向のある子どもたちにとっては、そのような運動は、将来の職業生活でそれを応用することになるかもしれません。何人かの子どもたちがどれだけ早く建築することを好む傾向を示し、他の者が次第にそれを承認するかを観察するのは面白いことです。そして、教師

(master) の側で権威的に調整をしなくても、一人か二人の子どもは建築の**親方 (masters)**になるでしょうし、1 ダースの子どもは労働者としてレンガ運びに満足するでしょう。より先の生活においてと同様に、一人が指揮をとり他の者がそれに従うのは、ここにおいてなのです<sup>i</sup>。5-7 歳児部門やそれよりも上の部門では、スポーツや試合は、より競技的な性質をもちます。ただし、石を投げたり他者の楽しみを妨げたりするものは、いかなるものも排除されます。7-11 歳児 (Juvenile) の遊び場での監督の全般的原則は、5-7 歳児部門 (Initiatory Department) の遊び場でのそれと同じです。**後者が綿密に示されればされるほど、その効率は徹底するでしょう。**主な相違は、遊び場で過ごす時間の量にあります。幼児が一日の遊び場で過ごす時間の割合が 7-11 歳児の遊び時間よりも多くあるべきだ、ということは証明されてきました。全生徒は、屋内での授業が始まる通常授業の前の朝の約 30 分間、遊び場で過ごすことが許されています。そして、昼の 1 時間は再びそこで昼食またはディナー<sup>11</sup>をとり、また各授業の間には 10 分間の遊びが認められています。もちろん男性教師 (master-trainer) は、子どもたちとともにいますが、学級で教えてはしません。彼らは、しばしばそうなのです。また、ときには他の学級の子どもが遊んでいる間は、彼らは、一人か二人の見習い教師 (pupil teacher) となってもいいのです。この 1 時間ごとの

<sup>i</sup> 遊び場のなかにある屋根のある小さな物置は、雨天の間はとて有効である。

休息は、無邪気で楽しい娯楽に**逃れる**ために、元気を与え、活気づけ、たまっていた**熱気をはき出すことを許す**ので、決して時間の浪費ではない、ということが理解されています。

都市では、遊び場は、壁でその周囲を囲むべきです。田舎では時には木のくいが良いでしょうし、にわか雨の後の水が自然に流れ落ちるように、中央部は、ごく緩やかな傾斜をつけてならし、かまどの灰よりも良く固まる清潔なピットや川の砂利をまくべきです<sup>ii</sup>。都市の遊び場の適正規模は、幅が3.5から4フィートで、土壌は良質でなければなりません。花や低木を植え、その縁は自由に育つアルメリアかデージーあるいは地表約3インチの木製の手すりですと良いでしょう。また、赤と黒のフサスグリのような小果実の木を植え、縁にはイチゴを数区画植えると良いでしょう。

植物が成長しにくい狭い場所では、たとえどれだけ頻繁に入れ替える必要があったとしても、**鉢植えのゼラニウム**、アラセイトウや他の花を植えるべきです。子どもたちに「どんなものでも見るだけで、触れさせない」ということをしつけるつもりなら、私たちは「わざとらしく」物を置くのではなく、「**自然な方法**」で置かなければなりません。

あらゆる物をきちんときれいにしておきましょう。そうすれば、そのような大切な習慣が後の人生で失われることはないでしょう。道徳性が形成されるかもしれません。そうすれば、家のすべての戸の前をきちんときれいにし、その脇をバラやクレマチス、スイカズラで飾ることに喜びを覚えるでしょう。そして、都市の混雑した路地にも同じような習慣がもたらされ、地域共同体の健康、快適さ、幸福は、大いに増進されるでしょう。遊び場の花々は、心地良い関係を生み、多くの有益な教訓を与え、そして、時には教師 (trainer) が聖書の象徴について説明するのに役立つでしょう。花や果実をたえず目にし、それが手の届く所にあると、正直と自己否定の美德が行使されます。実践上の寛容に加えて、「神の目、我を見たまう」の徳義は、次のような興味深い事実を説明してくれます。それは、グラスゴーや他の大都市の最も貧しい地区において、7-11歳児や5-7歳児の遊び場では、子どもたちは毎日、自由に楽しんできたのですが、すべての子の手の届く範囲にスグリやイチゴがあるにもかかわらず、それらが熟する余地があった、ということです。実際に花が傷つけられることは稀ですし、万一そのようなことが起きますと、反則者の摘発がみんなにとっての教訓になるように、口頭でしつける授業のかたちでの取り調べが全生徒の前で行われるのです。

#### 屋外と屋内の清潔 (CLEANLINESS OUT-OF- DOORS AND IN-DOORS)

<sup>ii</sup> なめらかさや耐久性のためには、アスファルトは、回転軸のまわりにはとても有効である。

——11歳以上のシニア部門及び初等部門や7-11歳児部門だけでなく、5-7歳児部門 (Juvenile) においても、清潔には最大の注意が払われるべきです。子どもたちの中には、当然、他の子よりも不潔で習慣の乱れている子どもがいます。しかし、そのような傾向は全て道徳の教師 (moral trainer) によって点検され、成人期には非常に困難ですが、人生の早い時期には大いに改善されるでしょう。

ギャラリーでの訓練授業は、それに関することを知っていてもいなくても、特定の失敗例から行われるべきです。教師 (trainer) が慎重かつ細かく違反行為を描けば、違反者がだれであるかはほぼ確実に確認できるでしょう。智慧を使えば、彼個人のことは秘密にしておくことができます。しかし、ギャラリーは、みんなで教訓を受けていますので、違反者は仲間全員が表明する非難から、とても長く続く教訓を得ているのです。共感と事例は、潔癖さの習慣の確立において強力に働きます。

**回転式ブランコ (CIRCULAR SWINGS)** ——これらは遊び場の設備として、必要不可欠な一つの部分であるといえるでしょう。遊び場のために通常割り当てられた空間の中に、男子用と女子用の回転式ブランコが一つずつなければ、80人から100人の子どもたちが容易にたくさん楽しむことはできないでしょう。さらに、その運動が子どもたちの中で作り出す、正しい秩序と自己克己という習慣は、若者をしてつけていくなかでの適切な楽しみとしての運動〔の側面〕を明らかにするでしょう。この運動では、子どもたちは決して退屈せず、完全に安全です。そして、ブランコと通常名づけられているもの、つまり座席のそれぞれの端を2本のロープで固定し、2本の柱または木の間に下げたものよりもそれははるかに安全なのです。後者の主な楽しみの一つは、揺れによっていくぶんかぼうっとすることから生じます。しかし、回転式ブランコは、座席に座って見物人の意のままなすがままに前後に揺られるというだけの反復ではなく、一人ひとりの子どもは自らの動きの調節者なのです。稀に落ちて失敗しますが、特定の作用の動きからそれが起きても危険はないのです。

柱は、少なくとも5フィートは地面に埋められて十分に固定され、互いに少なくとも33フィートから35フィート離れていなければなりません。5-7歳児用の高さは地面から約17フィートあるべきで、〔5-6歳の〕幼児用は14フィート以下であってはなりません。高ければ高いほど動きは容易になります。柱のてっぺんでは、直径2フィートの円形の鉄板に6本のロープが付けられており、この鉄板は、丈夫な鉄製の旋回軸上で、11インチないし12インチの深さで直径が約2インチのシリンダーの穴の中を回転します。故障や落下が起こるのを防ぐために、それは受け口の中で容易に動き、非常に丈夫で十分に安全ようにする必要があります。子どもたちのさまざまな身長に合わせるために、

ロープは数インチごとに、ウーステッドの綴じ房か、ロープ自体の簡単な結び目で束ねるのが良いでしょう。

それぞれの子どもは、ロープのかろうじて手が届く高さの所を両手で握り、みんなで同時に始めます。彼らの腕は必要に応じてだけ伸ばされています。これには胸を広げ、肺を自由に運動させる効果があります。彼らの足は地面に着きますので、乗っている子どもたち全員が可能な限り速く円の形を描いて走ります。そして、遠心力によって徐々に彼らの足は離れ、言葉にできないぐらいうれしいことに、子どもたちの誰もが空中で旋回していることに気づくのです。その動きは、一人または複数の子どもたちが、時折、足を地面に伸ばして 2、3 歩歩くことによって続けられます。四肢と体の、実にすべての筋肉の運動が、このようにして行われます。この運動をしている間の遠心力の自然な効果は、血液が頭から足の方に向かうことです。乗っている者は、ある方向に数回転した後、止まって手を代えて反対方向に回転するべきです。それぞれの子どもは他の子どもとは独立してつかまっていますから、随意に、続けることもやめることもできます。これは昔のブランコよりも多くの多様性を与えますし、同じ空間でより多くの数の子どもたちが参加できるのです。というのは、それぞれのポールでは一度に 6 人の子どもたちが乗っているだけですが、その周りでは、20 人から 30 人が歌ったり、30 か 40 まで教えたりしながら円形に並ぶことができるからです。また、たいいていは彼らはそうするのです。その後で、乗っていた者は、ロープを離し、次の子のために席を譲らなければなりません<sup>iii</sup>。5-7 歳児部門の子どもが午前 9 時から午後 4 時まで学校にいる場合、**およそ 1 時間半を屋根のない教場で遊びに費やすのは良いことです。**7-11 歳児には、1 日に 2 時間がほぼ水準です。疲労は避けねばなりません。そして、このために、彼らがスポーツをしている間、教師 (master) や女教師 (mistress) は、**駆りたてるのではなく主導**せねばなりません。

5-7 歳児部門や 7-11 歳児部門、あるいは 11 歳児以上の部門 (Senior) であっても、遊び場の整備は同じです。ただし後者の 2 つの部門では、可能ならば「ハンドボール」用のかなり高い壁を備えるべきです。そして、すべての部門で、大雨を避けるために、また健康面で弱い少女たちのために、屋根のある小屋をつけると良いでしょう。回転

<sup>iii</sup> 回転式ブランコを使い始める子どもたちは、一様に取り付けられた鉄板のロープの握り方を誤る。すなわち、両手を上方に伸ばして、自ら両腕で支えるのである。しかし、簡単に優雅な本来の運動の方法は、次のようなものである。ロープの最も低い結び目を左手で握り、左側の肋骨の位置の下にそれをびったりときつく押しつける。このようにして子どもたちは、逆方向に回転することなく前方に向かって動き、2、3 歩走ったり、随意に自らを支えたり、完全に自由に操ったのである。『ロープを握る方法』より。

式ブランコや体操用のポールに加えて、羽根つき、ラグレース、縄跳び、ビー玉、大きな中国式食器などが準備され、さまざまな遊びが導入されると良いでしょう。

前述のように、この忙しい現場では、子どもの澁刺とした快活さを抑制するのではなく、助長するために、男性教師 (master-trainer) は常駐し、同時に、性格と気質の発達を観察しているべきです。教師 (master) の至上の権威は、みんなに承認されていることです。彼が子どもたちと遊んだりブランコをしたりする際に、腰を低くしているのは、優しさと名誉だと受けとめられます。そしてそれゆえに、彼は身体的な影響力よりもむしろ精神的な影響力をもって指導することができるのです。

#### 4. 「遊び場」論の史的限界—結びに代えて—

以上、ストウの著作『トレーニング・システム』の「遊び場・屋根のない教場」を訳出してきた。ここで今一度、その要点を述べるならば、ストウの「遊び場」の重視の考えには、学校に設置した「遊び場」を身体教育としてだけでなく、道徳教育の一環として捉えている、という点である。ここでいう道徳教育は、宗教的な文脈を有しつつも、むしろ情緒的な発達を促すという意味を強く有している。そこには遊びという活動を介して、また他者との関係の中で、子どもの感情を抑制する「しつけ・訓練」が潜在している。それは、スミスの言う「公平な観察者 (impartial spectator)」の目を外部 (外なる人) にではなく、自己の内面 (内なる人) に育むことを意図したしつけ・訓練である。その意味において、「遊び場」という施設は、自由な場ではなく、教育的監視の範疇に位置づけられている。ただ、子どもが労働者であった歴史的状況下で「遊び場」の意味を捉えてみると、そこには「労働からの自由・解放」としての学校と、その学校での「机上の学習からの自由・解放」としての「遊び場」の意味があり、「遊び場」には二重の自由概念が存在していることがわかる。

しかし、教師に管理された遊びを遊びと称することができるか否かは、今日的視点からすれば疑問である。ここでこのような疑問が些かなりとも生じるのは、‘play’という言葉の語義に関わっている。アメリカで新教育 (進歩主義教育) 運動を推進した哲学者・デューイ (Dewey, J., 1859 - 1952) の弟子、キルパトリック (Kilpatrick, W. H., 1871 - 1965) によれば、‘play’は、「流れる水の上に木の間をmelerる光と影が動いているというのがこの言葉の真の意味である」<sup>12</sup>。つまり、‘play’とは、流れる水、言い換えれば、子どもの身体の約 70 パーセントを占めると水とその生が営まれる時間軸上において、自然の光を受け、浮いたり沈んだりしながら、人が生きていく様を表しているのである。そこにあるのは、水と光と植物といった自然物であり、「遊び」は人工的な意図を介在させるのではなく、むしろ自然界の力に委ねられた時間帯に生じる自然な動き、ということになる。

とはいえ、ロマン主義的なイメージを有する‘play’の語義が、当時あるいはその後の教育思想家に理解されていたかといえ、これもまた些か疑わしい。なぜなら、20世紀のイギリスの新教育運動を推進したナン（Percy Nunn, 1870-1944）やクック（Henry Caldwell Cook, 1886-1939）でさえ、そうした遊びの本義への考慮は見られないからである。たとえば、ナンは、『教育—その第一原理—』（初版1920）の第8章「教育における遊び活動」において、「遊びが創造的本能を示している」<sup>13</sup>と述べているが、それもまた遊びの原義への考慮はない。また、ナンが推奨した『遊戯法（*The Play Way, an Essay in Educational Method*）』（1917）でも、著者のクックは、教育活動に遊びの要素を取り入れた方法を推奨し、「より多くより良く遊ぶ」過程を重視したが、彼もまた遊びを教育の手段として捉えているからである。もちろん、彼の重視する「遊戯法」は、「学問的探求を楽しくするためのいろいろな方法ではなく、楽しい探求を価値あるものにするための実践哲学」<sup>14</sup>であった。しかし、その探求は未だ表面的なものに留まっている、という評価を甘受せざるを得ないかも知れない。推察するに、イギリス新教育運動に傾倒する教師たちにとっては、読み・書き・計算に偏重した教育内容の中核に「遊び」概念を据えること自体が、大きな教育革新であったのであろう。であるならば、ストウの生きた時代、つまり産業化・工業化の進行する19世紀半ばのイングランドやスコットランドの社会においては、遊び場を学校に設置し、遊び道具を準備するという提案自体が極めて革新的な思想であった、と解することができる。

ただ、それにもかかわらず、「遊び場」とそこでの活動を教師が監督する限りにおいて、「遊び場」論にはアンビバレントな意味が内在しており、それを強調すればするほど、逆説的にも、「遊び」はキルパトリックの称する真の意味での‘play’にはなり得ない、ということになる。さらにいえば、教師の視線の先にある管理・監視・監督といったいわゆる教育的配慮を解放しない限り、真の‘play’は提供できないのである。ここに教育思想における「遊び場」論の限界と逆説的の局面が顕在化し、その状況は、近代学校あるいは近代教育の「遊び場」の歴史的限界と捉えることができよう。

しかも、こうした「遊び場」をめぐる教育状況は、イギ

リスだけでなく日本においても同様であった。ちなみに、日本の学校教育において「遊び場」、すなわち「遊歩場」の設置が推奨されるのは、1875（明治8）年以降である。青木の研究によれば、山梨県の小学校事務雑則（明治8年）には、「校舎ニハ東南ニ方リテ一箇ノ遊歩場方式拾間以上ノ地位ヲ設ケテ体操運動ノ器具ヲ準備スヘシ」とあり、同県学校建築法ノ概略（明治10年）には、「遊歩場ハ柵ヲ以テ之ヲ回繞シ又其場中ニ柵ヲ設ケテ男女ヲ区別スヘシ其広サハ生徒百名ニ百坪位ノ割合ニ設ケ」と記述されている<sup>15</sup>。前者は、校舎の東南の位置に式拾間（約1.82メートル×20=36.4m<sup>2</sup>の広さ）の遊び場を設けること、後者は、遊び場の周辺を柵で囲い、また男女別にするためにその中に柵を設けること、その広さを生徒100名当たり100坪（3.3m<sup>2</sup>×100=330m<sup>2</sup>）にすることを指示したものである。ただし、明治の初めのことであるので、積極的に設計当初から遊歩場を作るのではなく、空き地を当てたというのが実態のようである。それゆえ、近代の学校教育が進行することによって、「遊び場」は教育的意図の範疇に入っていた、と解釈することができる。実際、日本の学校教育においては、遊戯場（遊歩場）は、後に体操場あるいは運動場に性格を変えていったのであり、やがて「遊び」という意味を消失させていったのである。したがって、教師による監視の目が張りめぐらされた「遊び場」の思想には、アジール空間の入り込む余地はほとんどないと解することができる。

さて、再び西洋に目を向けると、ストウの著作から120有余年を経た1961年、国際遊び場協会（International Play Association, IPA）<sup>16</sup>が設立され、子どもの遊ぶ権利の保障の重要性が国際的に認識されることになった。オールドリッチによれば、これは、正規の遊び場だけでなく、家庭環境、学校、診療所、病院などの施設においても子どもの遊ぶ機会を十分に保証しようとするものであり、この協会は、その後の1977年に「子どもの遊ぶ権利マルタ宣言」をまとめた<sup>17</sup>。この「マルタ会議は、栄養、健康、住居と教育という基本的ニーズとともに、遊びがすべての子どもたちの能力の発達に不可欠であることを宣言」<sup>18</sup>したものであった。「遊び」が人間の本能であり、それを充足させる権利が子どもにあるというこの宣言は、オウエン、ウィルダスピン、ストウによって展開された「遊び」あるいは「遊び場」という概念が、今日に息づいているということを示唆している。

#### — 注 —

- 1 このコメントは、2012年1月2日付けの筆者の質問メールに対する返答に基づく。
- 2 デイヴィッド・ハミルトン著、安川哲夫訳『学校教育の理論に向けて—クラス・カリキュラム・一斉教授の思想と歴史』世織書房、1998年、pp. 113-118.

- 3 日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』研究社、2007、pp. 106-107、pp. 394-395.
- 4 バルトン・アポン・ハンバー（Barton-upon-Humber）のウィルダスピン夫妻が携わっていた学校は、現在、学校博物館となり、公共機関とボランティアの手によって整

- 備・運営され、学校教育史を学ぶ施設として存続している。次のウェブサイト参照。  
<http://www.wilderspainschool.org.uk/> (アクセス日: 26th Sep. 2011)
- 5 ニュー・ラナークについては、次のウェブサイト参照。<http://www.newlanark.org/attractions.shtml> (アクセス日: 26th Sep. 2011)
- 6 Stow, D., *The Training System: Moral training school and normal seminary for preparing school-trainers and governesses*, Elibron Classics, 2006, pp. 207-214.
- 7 ここで用いられている 'school-room' は、'class-room' とは異なっているため、教場と訳す。なお、今日の教室 (class-room) がイギリスの学校に出現するのは、19 世紀後半である。
- 8 イギリスで用いられている 'Training School' という言葉は、日本では、一般に、師範学校と訳されてきたが、ここではそのような意味をもたないため、「訓練学校」と訳すことにする。
- 9 図 3 及び図 6 を参照。ギャラリー・レッスンの特徴や意図については、次を参照されたい。拙稿「第 7 講 近代学校の出現とその方法原理」、宮野安治・山崎洋子・菱刈晃夫『講義 教育原論—人間、歴史、道徳—』所収、成文堂、2011、pp. 95-101.
- 10 この時期、イギリスでは、学校に行っている幼児・児童・生徒を年齢によってゆるやかにグループ化していたが、それらは明確には決まっていなかった。本稿では、教育史学者の Dr Petre Cuningham の助言にしたがって、Initiatory Department を 5-7 歳児部門、Juvenile Department を 7-11 歳児部門、Junior Department を 7-10 歳児部門、Senior Department を 11 歳児以上部門と訳す。
- 11 ディナーという言葉は、しばしば夕食と訳されるが、ここでは昼間取る食事を指している。これは 19 世紀独特の言葉ではなく、今でも学校の昼食をランチと言わずにディナーという言葉も用いられている。
- 12 W. H. キルパトリック著、西本三十二訳『新教育の創造』牧書房、昭和 23 年、pp. 298-299.
- 13 T. Percy Nunn, *Education: its data and first principles*, London: Edward Arnold, 1926, p. 89.
- 14 リチャード・オールドリッチ、山崎洋子・木村裕三監訳『教育史に学ぶ—イギリス教育改革からの提言—』知泉書館、2009、p. 319.
- 15 青木正夫「小学校の運動場に関する建築史的考察」日本建築学会九州支部研究報告第 11 号、1962、pp. 73-81.
- 16 IPA については、次のウェブサイトを参照されたい。<http://ipaworld.org/about-us/declaration/ipa-declaration-of-the-childs-right-to-play/> (アクセス日: 14th Jan. 2012) なお、事務局の連絡先は、David Yearley IPA The Old Barn Wicklesham Lodge Faringdon SN7 7PN であり、日本の IPA 事務局代表者は、同志社女子大学教授の笠間浩幸氏である。(Yearley 氏からの 2012 年 1 月 16 日筆者宛メールより)
- 17 その条項については、上記注 11 のウェブサイトとリチャード・オールドリッチ前掲書 (pp. 320-322) を参照。
- 18 リチャード・オールドリッチ前掲書、p. 321.